

プログラム・ノート

上田泰史

モーツァルト：幻想曲 ハ短調 K. 475

1785年5月にウィーンで作曲。「幻想曲」とは元来即興演奏を意味する。本作でも、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)は冒頭のハ短調の和音をすぐさまはぐらかしてしまう。様々な様式による緩急4つの部分が連続し、最後に冒頭のアダージョが戻ってくる様は、さながら演劇を観るかのようだ。ピアノ・ソナタ第14番と対で出版されており、作曲者はソナタの前奏曲のような役割を与えたとみられる。

モーツァルト：ピアノ四重奏曲第2番 変ホ長調 K. 493

1786年6月にウィーンで作曲。弦楽器と鍵盤楽器間の多様な組み合わせと対話が試みられている。**第1楽章**：ソナタ形式。威勢のよい行進曲風の第1主題部とカンタービレな第2主題部が対照を生み出す。**第2楽章**：ソナタ形式。第1主題は前楽章の第2主題のモチーフを引き継いでいる。そっと囁くような対話的表現に重点が置かれている。**第3楽章**：ソナタ・ロンド形式。冒頭、ピアノ独奏と弦楽3パートが舞曲風の主題を対話的に打ち出す。第1楽章よりもはるかに器乐的で、展開部ではハ短調による劇的なピアノのパッセージが披露される。

ブラームス：6つのピアノ小品 作品118

1893年の夏にオーストリアの避暑地パート・イシュルで作曲された。ヨハネス・ブラームス(1833～97)は作曲当時60歳、すでに晩年を迎えていた。一見、回顧的な印象を連ねた脈絡のない内面的素描集のようだが、曲を追うごとにイ長調から2度ずつト調、ヘ調、変ホ調へと下行する配列になっており、最後の深い憂愁に彩られた変ホ短調まで少しずつ気分が沈下していく。

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 作品34

作曲はブラームス29歳の時に遡る。はじめ弦楽五重奏曲として作曲され、2年後に「2台ピアノのためのソナタ」版が作られた。最終的にピアノ五重奏の編成に書き直して1865年に出版した。**第1楽章**：ソナタ形式。民謡風の主題が嬰ハ短調、変ニ長調の副次主題と引き立て合う。**第2楽章**：変イ長調の平穏な旋律に伴う裏打ちリズムがそれを乱すが、ホ長調のセクションを経て次第に多幸感が増す。**第3楽章**：第1楽章の主題を活用した行進曲風部分が、危機感を煽る楽想と交代する。中間部では朗々と凱歌が奏でられる。**第4楽章**：神秘的な序奏に続きジプシー風の舞踏主題が現れる。ベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲を思わせる粗暴なまでのエネルギーが地から湧き上がる。最後はラテン的な舞踏であるタランテラで幕を閉じる。

(うえだ やすし・音楽学)